

# 平成29年度 第1回旧御所水道ポンプ室の保存・活用に係る懇談会議事録

日 時 平成29年10月31日（火） 午後4時～午後5時

場 所 琵琶湖疏水記念館 2階ホール

出席者（五十音順，敬称略）

## 1 委員

石田 潤一郎	京都工芸繊維大学教授
窪田 裕幸	京都商工会議所産業振興部長
中嶋 節子	京都大学大学院教授
宗田 好史	京都府立大学副学長
山田 有希生	京阪ホールディングス株式会社経営統括室事業推進担当部長
山添 洋司	京都市公営企業管理者上下水道局長

## 2 京都市

京都市公営企業管理者上下水道局長，水道部長，総務部経営政策担当部長  
事務局（水道部管理課・施設課，総務部経営企画課）

次 第

## 1 開 会

- (1) 京都市あいさつ
- (2) 本懇談会の概要説明
- (3) 委員の紹介

## 2 委員長及び副委員長の選任

- (1) 委員長及び副委員長の選任
- (2) 委員長あいさつ

## 3 会議の公開について

## 4 議 題

- (1) 旧御所水道ポンプ室について
- (2) 旧御所水道ポンプ室の耐震診断結果について
- (3) 琵琶湖疏水通船復活事業について
- (4) 立地ポテンシャルについて

## 5 今後の予定

- (1) 今後の進め方及びスケジュールについて
- (2) 第2回懇談会について

## 6 閉 会

## 内 容

### 1 開会

#### (1) 京都市あいさつ

京 都 市： 皆様方には、今回の懇談会の委員の就任を快く引き受けていただき、感謝申し上げます。

琵琶湖疏水そのものが産業遺産として、それから、水道や発電に利用することで、今なお京都市民の生活も支えている重要な施設である。実地で生きている施設だが、いわゆる疏水の魅力を向上させて、市民や観光客の皆様にもその良さを十分に知っていただきたいということで、この間、色々活動してきている。

琵琶湖の通船は、これまで3年間で5回試行事業という形でやってきたが、新しい船もできて、来年の春から本格実施する運びになっている。

蹴上の乗下船場のそばに旧御所水道ポンプ室がある。かねてからこの重要な施設をどうしようかという話があったが、疏水の魅力を一層知っていただくという観点から、どのようにしていったらいいのか、活用の術があるのか等について、委員の皆様方から忌憚のない御意見を賜りたいと思っているので、よろしくお願ひしたい。

本日は時間が限られている中で、我々の事業の説明等が多くなるかもしれないが、懇談会は今後複数回開催して、有効な活用の方向性についてそれぞれの立場から御意見を賜りたいと思っている。どうぞよろしくお願ひしたい。

#### (2) 懇談会の概要説明

事 務 局： 資料の説明（資料1）

#### (3) 委員の紹介

事 務 局： 各委員の紹介

### 2 委員長及び副委員長の選任

#### (1) 委員長及び副委員長の選任

旧御所水道ポンプ室の保存・活用に係る懇談会設置要綱第5条第2項に基づき、委員の互選により、宗田委員を委員長に選任

旧御所水道ポンプ室の保存・活用に係る懇談会設置要綱第5条第2項に基づき、委員長の指名により、山田委員を副委員長に選任

#### (2) 委員長あいさつ

宗田委員長： 御指名をいただいたので委員長を務めさせていただきます。

琵琶湖疏水を産業遺産として世界遺産に登録したらどうかということ、京都商工会議所が提案されたのが十数年前である。その時もJ R東海の須田寛相談役が、日本商工会議所 観光小委員会 委員長として産業観光に大変熱心に取り組んでいることもあって、通船を復活したらどうかと言われた。須田相談役はかつて岡崎にお住まいで、インクラインが動いていた頃、琵琶湖の船頭達が船溜まりで七輪を使って魚を焼きながら昼食をとっていたという話や、本当

に船が動いていた時代の京都と大津の関係、これが大きな観光資源になるという話をされた。また、イギリスは産業革命発祥の地だが、産業革命初期の時代のアークライトの水力紡績機がダーウェントバレーの産業遺産群として世界遺産に登録されていることも引き合いに出し、ダーウェントバレーでは今、かつての水路が成熟社会の観光施設として、大勢の観光客が見に来るようなものではないが、ゆっくりとボートを浮かべて個人個人がその船の上で1週間から2週間の船旅を楽しむというようなイメージを紹介された。我々も見学に行って、琵琶湖疏水に持てる期待が非常に大きくなった。

近代水道事業は、国民や市民の安心・安全、特に衛生を改善することに画期的な役割を果たし、同時に工業用水等の膨大な都市の水道需要に応えてきた歴史がある。そういう意味では、京都市の上下水道事業は大変長く近代化の歴史の中心にあった所である。そこでは安心・安全を非常に重視していたので、観光利用に関しては理解が得にくかった。京都商工会議所で取り組んだ時代も上下水道局の理解が管理運営上得られなかったことをよく記憶している。

それがこのような形で、門川市長の英断もあって新しい流れが作れていくことになった。その中で今回、旧御所水道ポンプ室は京都市が率先して取り組む文化遺産事業の目玉として、京都の名に恥じないものにしたいと思っているので、先生方の手厚い御協力をいただいてしっかりしたものにしていきたい。よろしくお願ひしたい。

### 3 会議の公開について

宗田委員長： 今日の議事進行について、事務局から説明をお願いします。

事務局： 議事及び資料の確認

宗田委員長： 会議の公開について、事務局から説明をお願いします。

事務局： 資料の説明（資料2）

宗田委員長： 本懇談会の会議は原則公開である。今日の懇談会では特に非公開情報を取り扱わないので、原則どおり、公開で行うこととする。

本日の会議の議事録については後日公表することとする。

議事録は2名の委員の署名が必要ということなので、出席委員の名簿順で、石田委員と窪田委員にお願いしたい。

### 4 議題

- (1) 旧御所水道ポンプ室について
- (2) 旧御所水道ポンプ室の耐震診断結果について
- (3) 琵琶湖疏水通船復活事業について
- (4) 立地ポテンシャルについて

事務局： 資料の説明（資料3～7）

宗田委員長： 旧御所水道ポンプ室の建物を具体的にどう使うかという説明がないが、そこは全て白紙ということか。何か京都市としての考えはあるのか。

京都市： 現時点においては、具体的にこういう方向でというイメージはない。これから検討していきたいと考えている。

宗田委員長： 了解した。そういう状況なので、委員の皆様方には専門の立場から今日御覧になった感想、今後どのような方向性で検討すべきか等、第1回目なので最初の感想ということでお願いしたい。

石田委員： 私は近代建築史が専門なので何度か建物は拝見していたが、今日改めて細かく見ると、文化財的には非常に残存している状態が良い。建具など本来傷みやすいと思われる所が良く残っていることに感動した。また、デザイン的に非常に美しいものだという事はよく承知しているが、材料、特に石の使い方が大変贅沢というか、1個の石を削って装飾を作り出している。小さなピースを組み合わせるのではなく、数十センチ角の石から作り出すことをしていて、さすが宮内省の営繕だと思った。しかも施工の精度が非常に良い。そういったことから、歴史的建造物としての価値が非常に高いものであると改めて感じた。

宗田委員長： 文化財保護課は今日来ているのか。奥委員がその立場だが欠席であるため、文化市民局としてこの建物をどう取り扱うかということに関して、誰か発言できる人はいるか。

京都市： 申し訳ないが、発言できる者はこの場にいない。

宗田委員長： 文化財行政としてすべきことは当然きちんとしなければいけない。これだけの歴史的価値のある建造物だと、京都市として国と協議をしながら文化財的な価値を追求することになる。それについては次回、奥委員から京都市文化財保護課、文化市民局としての立場を聞きたい。文化庁とも相談しているだろうから、御意見を聞くことから始めていきたい。今回は上下水道局の懇談会としてスタートしているが、京都市文化市民局としての懇談会が必要な時に先生方の御協力をいただくことも今後あるだろう。

中嶋委員： 私は都市計画の方が専門で、通船に乗った機会も含めて3、4回あの辺りを拝見している。今回、文化財的な価値とか建物の価値という視点で石田先生と一緒にまわらせていただいたが、先生も言われたように大変きちんと造っている。京都のレンガ造の建物の中でもデザイン的・技術的に優れており、京都の歴史の中で、旧御所水道ポンプ室という非常に京都らしい都市施設の1つとしても高く評価できるのではないかと思った。山側の付属屋もおそらく明治45年当時のデザインのものでそのまま残っているのだから、あの辺も含めて文化財の価値付けが必要。文化財的な視点、都市の歴史・京都の歴史の視点からあの建物を明確に位置付けた報告書というか調査がまだできていないと思う。この活

用を前提に考える前に、あの建物の価値を評価すべき。耐震が相当弱いという数字が出ているのに驚いているが、その価値付けをまず明確にしていくのが大前提だと思う。それを踏まえて、その価値を念頭に入れながら同時進行的に、次にどう活用していくのかということを検討していきたい。

宗田委員長： 琵琶湖疏水の通船に関して山田委員にも話を聞いた。観光的な価値があることは明らかだが、テーマパークの中で船に乗るわけではない。我が国の歴史、特に近代の歴史を語る産業遺産・文化遺産としての琵琶湖疏水、全国どこにでもない世界有数の近代遺産としての琵琶湖疏水を船で行くことに価値があるわけである。京都という美しい町は紅葉も桜も綺麗で季節を楽しめて、そこに歴史都市京都の中の近代を切り取った琵琶湖疏水があり、その中に片山東熊の特に美しい由緒のある立派な建物があるから、この通船事業は華を持つわけである。この華を欠いて通船事業を行うようなことがあったら台無しになるので、これをいかに正しく保存していくかということが大きな課題である。

山田副委員長： 京都市上下水道局等と一緒に琵琶湖疏水通船事業の検討を始めて、私は平成26年の夏から関わっているが、最初に当時の水田前公営企業管理者上下水道局長の部屋を訪問した。その部屋に旧御所水道ポンプ室の絵が掲げられており、非常に美しいと思ったことを思い出した。私は建築には全く詳しくないが、準備期間中に疏水沿線を歩いたり、旧御所水道ポンプ室も見せていただき、非常に重みのある施設だと思った。

平成29年10月21日付の読売新聞の、旧帝国奈良博物館本館について言及している記事の中で、今年は片山東熊没後100年に当たると書かれていた。この懇談会がこの秋に開催されるのは感慨深いものがあり、その中でメンバーに加えていただいて非常に幸せに感じている。

来年、明治維新150年という節目に我々は疏水通船の本格事業をするわけだが、この3年間の過程で意識してきたことを皆様にお伝えしたい。1つは、通船という乗り物なのでまずは安全第一。2つめはサービス。顧客満足の中で特に意識したのは、宗田委員長が言われたとおり、テーマパークの船とか外洋のクルーズ船とは違うということ。疏水建設の背景や歴史の重みを理解することが大事である。これは京都から東京に遷都した後、京都の建て直しをする中で努力されたもので、かつ、建設の中でただ単にトンネルを掘るだけではなく出入口には扁額を掲げている。旧御所水道ポンプ室もそうだが、100年以上経って評価されることをある程度予期しているような造り方をされている。本当に明治の先人は良いものを残されたと思っている。

通船のガイドの評判が良いことがアンケート結果に出ている。ガイドは水道局の100年史等を非常に勉強して、話す内容も練りに練ったつもりである。ただ単に桜が綺麗、紅葉が綺麗というだけの琵琶湖疏水沿線ではなく、年中楽しめる観光にしていきたい。

こちらは蹴上の乗下船の栈橋があるが、お客様からちょっと飲み物が欲しいとか食事をとりたいという声をよくいただく。トイレの問題等もあるし、利活用という意味ではそういった議論も大事だが、活用の前に価値を評価すること

が前提である。その前提を崩してレストランを作ったら良いとかいう軽々しい議論にすべきではない。まずきちんと前提を押さえたうえで、そういう話をしていきたいと思っている。

宗田委員長： 大変心強い意見である。

片山東熊を含め大勢の建築家が、100年後の今日見られることを意識して作ったものだという御意見は多分そのとおりだと思う。当時の、特に宮内省の建築家は、100年後も皇室が安寧であることを祈り、当時の大日本帝国の発展を確信していただろう。その100年後を見越して建てたものが、今我々の手でどうやって本来の美しさや輝きを発することができるかというお手伝いをさせていただくわけだから、当時の人の思いというものをもう一度よく心に留めて、通船を利用するお客様と一緒に愛でることができる形にしていく。それが京都の誇りかなと思う。

窪田委員： もともと京都商工会議所の役員が、産業遺産としての琵琶湖疏水を活用したいという思いがあった。結果、関係者の努力で来年から琵琶湖疏水通船事業が本格始動するというので、特に観光・運輸部会の関係者・役員の方々が非常に期待している。

しかしながら、商業的に活性化すれば良いとは決して思っていない。建築物としての価値の話があったが、京都が培ってきた歴史的・文化的な価値はしっかりと評価すべきだと思う。最近よく「文化財の活用」と声高に言われて動きも活発になっていて、京都市で言うと二条城も積極活用されているが、それをしっかりと維持していくために、京都の伝統技術を持った方々が技術の継承も含めて深く関わっている。京都が持っている産業技術を残しながら、それを特に若い人に伝えていくことも非常に大事だと思う。そういう観点から、まずは文化財・建物としての価値を位置付けることが大事だろう。

さらに欲を言えば、琵琶湖通船が継続運営していくためには採算性の問題も今後検討を深めていく必要があるので、そういったこともバックアップできるくらいポンプ室が商業的に上手く活用できるのであれば、それが一番良い形かなと思っている。ただ、そこに行くまでには現状とこれまでの蓄積というものを位置付けることが大前提なので、そこについてはしっかりと議論を深めていただきたい。

宗田委員長： 柔軟な御指摘である。そもそも須田相談役が通船の話をされた時、「釘を刺しておくが、これはどうあがいても採算性はない。鉄道を長くやっていたからこの事業は全く採算性がないことは分かるが、それでも希望として、文化遺産を愛でることからすると、通船は意味がある」と言っていた。鉄道事業とかサービス業をやったことがない素人は観光客が来ればお金が儲かると思うが、仮にここでカフェやレストランをやってもこのような不便な場所では通船のお客様しか来られないから、これで採算を取るとは不可能である。

また、車で行って見て分かったが、あそこまで車で来ることはほとんど不可能である。取水口があるからあの空間で観光客が滞留する、車を停めることに

もかなり制限がある。その辺りはよほど考えていかないと、観光だから金になるみたいなことはあり得ない。これが現実だということも、我々は専門家の目で厳しく見ていく必要がある。今日いただいた資料はあくまでも岡崎全体の活性化ということで位置付けるべきもので、決してこの旧御所水道ポンプ室だけのことではない。そういう意味で、まさに白紙からスタートしていけばいい。

そのように御理解いただいて、文化遺産の活用と同時に京都観光全体が活性化するという広い意味の中での位置付けが良いという御指摘かと思う。

山添委員：冒頭で文化財の話が出たが、京都市の文化財部門等からは疏水全線を文化財指定することを検討しており、旧御所水道ポンプ室についてもそれは言われてきた。一方で、現に今、水道や発電に使っている施設なので難しい部分もある。現段階では、平成8年に当時の文部省から12箇所について史跡の指定は受けている。その資料は次回提出する。その他の所についても文化財云々の話はあるので、文化庁が移転して来るからというわけではないが、前向きに考えていかなければいけない。色々なレベルがあると思う。例えば片山東熊のものだと、これまでを見ているとかなり重い指定の施設も多いだろうが、そういうことを前提にするのかしないのかも含めての話になると思う。

通船が年間80日ぐらいだと乗船のお客様だけになるが、採算性の問題も含め、できればそれをもう少し広げていけたらいいのではないかと思っている。そうなると、今は上下水道施設としての一体化になっているので通常は誰も入れないが、あのゾーンの仕切りをもう少し変えて行けるようにできないかということも検討したらいいと思っている。今限られた人員だけが来る前提であそこをどうするという話だけではない。

もう1つ、疏水沿線の魅力向上について。山科の東山緑地という疏水沿線の辺りも建設局で予算を入れて公園整備することになっている。一方で、上下水道局も総合企画局と連携するが、今の蹴上の界隈を、この部分も含めてもう少し周遊性・回遊性が高まって、色々な人が歩いていただけるような整備として看板やパンフレット等もできる限りしていきたい。そういう方向性もあるかなと思っている。

宗田委員長：世界中の歴史都市で、ブラウンフィールドという問題がある。歴史都市に限らないが、産業遺産である工場跡や港湾施設跡等が焦げ茶色に錆びて捨てられている。そこに少し手を加えて魅力的な空間にしていくと都市再生が進んでくることがある。町並み、水辺、緑。岡崎はまさにこの3つが揃っている所なので、上手にすれば、非常に魅力的な京都らしい空間になる。そういう町づくりの一環として建設局にも頑張ってもらおう。琵琶湖疏水もその1つで、そういう意味の大きな流れがあるのは良いが、広域に処理しなければいけないのが難しい。三条通を安全に通っていただけるかとか、また来ていただけるようにしなければいけない。

京都市は早くから文化市民局に文化財保護課を置いた。つまり市長部局に文化財行政がある。文化財保護審議会・文化庁がその活用を念頭において、教育委員会・教育庁ではなく市長部局に文化財保護課を移すことを提案しており、

山田知事が京都府の文化財保護課を教育庁から知事部局に移す検討に入っている。そのように、総合的な文化・景観・観光が一体で京都創生として進めてきたというのが京都市の実績なので、今言われたような流れが建設局も含めて、京都らしい解決策にしていきたいと思う。

石田委員： 「保存・活用に係る懇談会」となっているが、保存と活用というのは、本来はかなり相反する概念である。保存というのは現在を触らずにできるだけ未来に過去を無傷で伝える行為だし、活用というのは現在の利便性をどれだけ高めていくかという行為なので、どこかでせめぎ合う部分がある。そこを何とか両立させるためには、どこに価値があるのか、どこを守るべきでどこは変えてもいいか、むしろ別の価値付けをした方がいいのではないかというような視点での調査、価値判断を、我々も知見としてきちんと備えておく必要があると改めて思った。

宗田委員長： 100年後にこう見られたかったという片山東熊の思いを探っていただいて、それが実現できるようにすることが活用だと思う。

石田委員： 単に空き家のまま山陰に置いておいても朽ち果てるだけなので、何とかしなければいけない。その辺をどう塩梅するかということだが、その塩梅をするに当たり、多少使い勝手が悪くてもここは残したいという判断をしていく基準を持っておかなければいけないと思う。そこを改めて強調したい。

宗田委員長： 建物の魅力を損なうような活用は決してしないということはここではっきりしておいて、本当に良いものを見てもらおうということだけはしっかりやっていきたい。

中嶋委員： この懇談会の名称は「旧御所水道ポンプ室の保存・活用」で、この建物からどうするかというのはもちろん大きな議題だが、もう少し広がりを持ってはどうか。山添委員が出入口の整備等を考えて人の流れも検討していいと言われたので、建物をどう使うか、どう残していくかという話と共に、周辺部の活用ももう少し念頭に入れながら懇談会を進めていくべきだと思う。今、大きな地図は付けていただいているが、次回以降はぜひ周辺部の状況、例えば九条山の丸い池も含めて何か使えるかもしれないし、疏水から下りるお客様だけではなくインクラインから来るお客様の流れをどう作るか等、周辺部も含めて検討しながら、このポンプ室が最大限にキーになるような、一番そこに行きたいという人達が沢山出てくるような施設づくりや活用のあり方を検討できれば良いと思う。むしろポンプ室から周辺に発信できるような、ここに来るために周りをこういう風に整備したらどうかというアイデアもあると思う。

宗田委員長： 今日は意識して岡崎の色々な現状の資料を付けていただいたが、通船を降りたお客様がどう歩いて岡崎まで行ってくれるかということがネックだった。



中嶋委員： 願わくは、インクライン沿いを歩くなり、分線の方に回っていただくなりして、その拠点になるみたいな。

宗田委員長： 南禅寺方面や琵琶湖疏水記念館等、色々なルートがありそう。その道沿いに色々なものがまだ眠ってそうだと思う。

中嶋委員： そのつなぐ所に、良いものが沢山残っているのに知られずにいる所がまだあるので、セットで考えられる情報をいただける方が良いと思う。

宗田委員長： 山裾全体がもっと大きな周遊・回遊の空間として光ってくるようなことが考えられると良いのではないかな。

石田委員： 車で行く時に、インクラインの所で扮装して写真を撮っている人が何組もいた。和服の人達も来る時にちらっと見かけた。今はインクラインを上がってきて、写真を撮り終わったらすぐ下りて、せいぜい「ねじりまんぼ」を通るくらいのことしかできないが、ポンプ室まで行ってそこから逆方向の、西から東へ上がる周遊コースも考えられそうだなと思って見ていた。

宗田委員長： 「ねじりまんぼ」まで下りて、あれをくぐれば岡崎の庭園という文化的景観だから素晴らしい散策コースが広がってくるわけで、近代が凝縮しているということではないだろうか。そこをどうするかというのが今回の議論の1つのキーになると思う。

また、山添委員からも説明があったが、今回は奥委員に京都市における文化財への取り組みを含めた話を伺う前提で御説明いただきたい。

時間も迫ってきたので、今後の進め方及びスケジュールについて、事務局から説明をお願いします。

## 5 今後の予定

(1) 今後の進め方及びスケジュールについて

(2) 第2回懇談会について

懇談会は平成30年3月までに複数回、実施することを案内し、第2回懇談会の開催日程については後日事務局より連絡することとした。

## 6 閉会